

カリタス女子中学校 第一回入学試験

二〇一七年二月一日 実施

# 国語問題

(五〇分)

\*答えはすべて解答用紙に記入すること。

\*字数の指定がある場合は、句読点をふくむこととします。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。※のついた言葉には、文章の最後に注をつけてあります。

人間がコンピューターに勝つためにはどうしたらよいか。

その方法は「考える」こと。コンピューターは「記憶きおくする」ことにかけては敵なしだが、「考える」ことを知らない。よく、プロの棋士きしと碁ごを打ってコンピューターが勝つたなんていうニュースを耳にする。コンピューターが考えているわけじゃない。知識として大量のデータを記憶しているのである。

A 本当の意味で「考える」ということは、日本人だけでなく、現代を生きる人間にとっても極めて難しい。なぜなら、われわれは「知識」をもっているからだ。

知識がある程度まで増えると、自分の頭で考えるまでもなくなる。知識を利用して、問題処理できるようになる。借り物の知識でなんとか問題を解決してしまう。

もちろん知識は必要である。何も知らなければただの無為むゐで終わってしまう。ただ、aと喜ぶのがいけない。良い知識を適量、しっかりと頭の中に入れて、それを基もとにしながら自分の頭でひとが考えないことを考える力をつける。

ところが、である。ふり廻まわされないためには、よけいな知識はほどよく忘れなければならない。しかし、この「忘れる」ことが意外に難しい。

学校の生徒で、勉強において「忘れてもいい」と言われたことはあるだろうか？ もちろん、今の学校教育ではそんなことは言わない。ともすれば「忘れてはいけない」と教え込む。すくなくとも、「どうしたらうまく忘れるか」などという学校はないはずだ。

しかし実は、「覚える」と同じくらいに、「忘れる」ことが大事で、【1】難しい。この「忘れる」ことによって、人間がコンピューターに勝っているのである。コンピューターは「覚える」のが得意な反面、「忘れる」のはたいへん苦手。B 人間のように、うまく忘れるということができない。

そもそも未知なものに対しては、借り物の知識などでは役に立たないのが当たり前だ。それまでの知識から①外れた、わけのわからないモノゴトを処理、解決するには、ありきたりの知識では役に立たない。いったん捨てて、新しい考えをしぼり出す力が必要となる。そういう思考力を身につけられれば、コンピューターがどんなに発達しようと、人間が存在価値を見失うことはないだろう。

人間はずっと「忘れる」ということをおそれてきた。とにかく忘れてはいけないと思いつ込んでいた。急に「忘れよ」などと言われたらひどくともどろ。たいていの人は、覚え方は上手でも忘れ方は下手である。

なにもそれほど難しく考える必要はない。自然に忘れる。一番簡単なのは「夜よく眠る」ことである。

前の晩に、頭に知識を一〇〇入れて寝たとする。朝になって、その知識がそのまま残っていてほしいと願う人があるかもしれないけれど、そんなことがあつては大変。頭が壊れてしまう。正常な頭なら、前夜の知識はガタ減りに少なくなっている。なぜか？ 睡眠中に忘却をすすめる働きがはたらくからである。この忘却の時間はレム睡眠と呼ばれる。人によって回数に違いがあるが、ひと晩に数回おこる。

起きている間の人間の頭の中へは、いわゆる知識以外にも、② 雑多な刺激が常に入り込んでくる。そのようにして流れ込んできたもので不要だと思われるものを、レム睡眠の時にはねのけているのだ。

人間の頭は、自分にとって「どうも大事なものらしいぞ」というものは自動的に忘れないようにできている。当面は頭の中にないほうがいいと思ったモノを、レム睡眠は整理する。朝、目を覚ました時、たいていの人がなんとなく清々しい気分になっている。レム睡眠のおかげで頭の中の掃除が行われた後だから、頭の中のゴミ出しが済んだ後だからである。

この自然忘却作用は本当に大事にしなければならぬ。夜よく眠れない人は、大至急、眠れるようにしないと頭が悪くなってしまう。昼、詰め込むよりも、夜、不要なものをすてる方が大事である。心身の健康のためにも忘却作用を大切にしたい。

けれど、勉強しすぎて知識をたくさんとり入れると、一日一回の睡眠だけでは足りない。ゴミがいつぱい溜まる。レム睡眠でゴミ出しをしてもなお、有害なゴミが頭の中に残る恐れがある。そんな場合、どうしても目が覚めている間に、よけいなことを忘れる努力をしなくてはならなくなる。有害なものは、なんとしても忘れないといけない。

そうかと言って、一日じゅう寝ているわけにはいけない。【2】、起きている間はこうした方がいいか、これはなかなか工夫が必要である。

その点、学校はうまくことをしてきた。それは、異なる授業を立て続けにやるということ。英語の次に国語、その次は社会、音楽。一見、支離滅裂のようだけれど、実はこれは非常に理にかなっていたのだ。なぜなら、前の授業で詰め込まれた知識を、まったく異なる次の授業によって、レム睡眠と同じほどではないが、忘れることができるからだ。

【3】三〇年ほど前、こういう時間割に<sup>③</sup>ヒハンの教師があらわれた。違った教科をつづけて教えては記憶効率が下がると考え、同じ内容を一括して教えれば学習能率が上がるとした。そして、「午前中はすべて英語」「午後はすべて理科」というように、休みもなくぶつ続けに授業を行うことにした。

結果はどうなったか？ 思いもかけず学力が急落してしまったのである。 b。異なる授業をやることだけでなく、授業と授業の間の休み時間もたいへん大事だったのだ。

休みに教室に残ってノートなんか整理したりする生徒がいると「感心だね〜」などと言う人がいるが、トンデモない。休み時間はどこにか外に飛び出して、思いきり体を動かして汗をかくくらいにする。そうすれば、教室に戻ってきた時には、「さっきの時間は何だったわけ？」となる。それが C 理想的な頭の状態。その後の授業の間は集中できる。

いろんなことをして忙しくしなければダメ。同じことをだらだらと続けていても、頭はよく働かない。頭がさぼってしまって学習効果もあがらない。とにかく忙しくすること！ 適当に忘れて頭をスッキリさせる。覚えて、忘れる、この切り替えがたいへんに重要なのである。

〈外山滋比古「知ること、考えること」(ちくまプリマー新書『何のために「学ぶ」のか』)

桐光学園+ちくまプリマー新書編集部編所収)より。一部改変〉

### 〔語注〕

- ※ 棋士 きし …………… 囲碁、将棋を職業にする人。
- ※ 無為 むゐ …………… 何もしないでいること。
- ※ ガタ減り …………… 急激に減ること。
- ※ レム睡眠 すいみん …………… 身体が眠っている状態なのに脳が起きているような浅い眠り。
- ※ 支離滅裂 しりめつれつ …………… ばらばらでまとまりがないこと。
- ※ 理にかなっていた …… 理屈に合っていた

問一 ①外れた ②雑多 ③ヒハンの漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直しなさい。

問二 「1」～「3」に入る言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度ずつしか用いないこととします。

- ア ところが      イ では      ウ だから      エ しかも

問三 A 本当の意味で「考える」を言いかえている部分を、問題文から十五～二十字でぬき出して書きなさい。

問四 a に入る言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 考えているのは自分だけだ  
イ 知識は何物にも代えがたい  
ウ 知識にわずらわされる自分ではない  
エ 知識は多ければ多いほどいい  
オ 知識は自分をうらぎらない

問五 B 人間のように、うまく忘れるということができない。とありますが、人間にもともとそなわっている「うまく忘れる」はたらきを問題文では何と呼んでいますか。六字でぬき出して書きなさい。

問六 C 理想的な頭の状態 とありますが、筆者はどのような頭の状態を理想と考えていますか。文章全体から読みとって書きなさい。

問七

b

に入る文としてもつともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア それは必要な知識を忘れた、からだ
- イ それは知識の必要を忘れた、からだ
- ウ それは忘れることの必要を忘れた、からだ
- エ それは記憶することの必要を忘れた、からだ
- オ それは集中力の限界を忘れた、からだ

問八

コンピューターがどんなに発達しようと、人間が存在価値を見失うことはないだろう。とありますが、筆者がこのように考える根拠となっている「コンピューターと人間の根本的なちがいは何ですか。書きなさい。」

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

月曜日、学校で給食にバナナが出た。

修は持って帰りがたかった。チイ子の大好物だから。母さんはそんなものを食べせるとうさぎがよけいふとるといって、いやがる。

修がこっそりカバンに入れようとしたら、うしろの席から手がのびて、バナナをつかんだ。堂本くんどうもとだ。ふりかえったらもう皮がむかれていて、堂本くんの大きな口がパクツと食いついていた。

「きらいなら、これからおれが食ってやるから、遠慮えんりよすんな」

給食はほんとは持って帰ってはいけないことになっている。

しかたなく前にむきなおつたら、となりの席の小野くんと目が合った。小野くんはちょっとまゆを下げ、笑うような、そうでないような顔をした。

① ホウカゴ、校門を出て修は足を止めた。

少し前に行くのは堂本くんだ。いっしょにいるのは小野くんらしい。堂本くんの肩かたくらいしか背がとどいていないからわかる。

小野くんは堂本くんを見あげながら、何かしゃべっている。笑いながら両腕りょううでを上げて、バナナの形みたいな手つきをしている。給食のときの話をしているのかもしれない。

二人といっしょになりたくなかった。追いつかないように、少しはなれてついていった。

公園の角で堂本くんが別れていったあと、小野くんは立ちどまって、修を待つようにうしろをむいた。しかたないのでふつうに歩いて公園のそばまでできてしまった。

「なんか飼かってる？」

小野くんは修が A 追おいつくなりきいた。

「え？」

「だって、三年生のときはバナナすきだったじゃん」

小野くんは去年も近くの席にすわっていた。

足もとの石をポンとけって小野くんは、ひとりごとみたいに行った。

「このごろバナナ持って帰るから、さるでも飼ってるのかなって思っただけ」

小野くんの左の黒目は、いつも少し外側をむいている。右目と左目でちがうものを見て、なんでも知っているらしい。「うち、さるみたいなのがいるんだ」

小野くんがそうだったので、修はびっくりした。

「バナナ大すぎ小ざる……っていうか、チビの弟だけど」

アハハと小野くんは笑いながら、**B** よれつとのびたTシャツのえりをひっぱった。糸が一本ほつれてとびでていた。なんだか気がゆるんで、修はついってしまった。

「うさぎ飼ってる……」

「わ、うさぎ」と、小野くんは目をかがやかせた。

「かわいいだろうな。小さいの？」

修はだまって首を横にふった。

「ふうん、大きいんだ。じゃあ、いっぱいバナナ食べるんだね、うさぎ」

チイ子はいっぱいなんか食べない。バナナはおやつだから、小さい一切れだけだ。ほんとは二切れほしがるので、はじめから一つを二つに切って食べさせる。それでチイ子は満足する。数のわかるかしこいうさぎだ。でも、小野くんにそんな説明をする自信はない。

修が何もいわなくても、小野くんは気にしなかった。

「うさぎって、やっぱり、走るの早い？」

「……わかんない」

チイ子を思いきり走らせたことなんかない。

「そうか。家の中じゃそんなに走れないよね。へやで飼ってるんだろ。じゃ、お父さんもお母さんもうさぎすきなんだ」

修は強く首をふってしまった。

「全然、すきじゃない」



小野くんはちょっとびっくりしたように修を見て、「そっか」とだけいった。

これまで修は友だちに自分のことをしゃべったことがなかった。なんだかよけいなことを話してしまった気がした。

〈 中 略 〉

水曜日の給食の時間、堂本くんがまた修の背中をつついた。

「おまえ、ほんとはバナナ大すきなんだってな。すきならすきってはつきりいえよ。おれがはじめたみたいじゃんか」

修は思わずとなりの席の小野くんを見た。小野くんが堂本くんにしゃべったとしか思えなかった。

小野くんはこつちをむいてこなかった。自分のイカリングフライにかぶりついている。

「お返しだ、バナナの」

堂本くんの声といっしょに、うしろから特大のイカリングがとんできた。

「食えよ。カバンに入れんな」

修はイカが苦手だ。それをいちばん知っているのも小野くんだ。

あきらめて修はそのイカにかみついた。皮がウニユーとのびて、かみきれない。ちぎったはずみにイカはふっと床ゆかに落ちた。

「なんだよ。ひとつのお返し、投げすてんのか」

堂本くんがこわい声でそういった。

午後の体育の時間、グラウンドに出る前に② おちまき タンニンの大崎先生が教室にきた。

「運動会まであと三日しかないが、リレーの吉田よしだくんがけがして走れなくなった。代わりを選んでくれないか」

修の学校の運動会はなんでも生徒たちでやる。高学年はプログラムも作るし、入退場門も作る。四年生だってリレーの選手は生徒たちで選んでいる。

各学年、各クラスは全部、赤組と白組に分かれていて、それぞれのクラスから赤組男女一人ずつと白組男女一人ずつ、選手を出す。「白組の男子で、希望者はありませんか」

クラス委員の関口くんが前へ出てみんなを見わたした。

「じゃ、関口くんたのんだよ」と、先生が出ていったあと、だれも希望者がいなかった。

「堂本くん、どうですか」

関口くんがきくと、堂本くんは「 1 」立ちあがった。

これで決まり、と修は思った。

堂本くんは、けがをした吉田くんと同じくらい足が早い。

なのに堂本くんは、とんでもない名前をあげたのだ。

「谷川修くんがいいと思います」

修はびっくりして息がつまりそうになった。そんなことをいわれるなんて信じられない。

修は五人のグループで走れば、よくても四位だ。リレー選手になるなんてありえないはずだ。

「もっと早い人がいいよ。堂本くんがいいんじゃない」といつているらしい声がした。

教室のあちこちでガヤガヤ聞こえるのに、だれも手を上げない。

「ほかにありませんか」

関口くんが大きな声できいた。

「ありません」

堂本くんがもっと大きな声で答えた。だれも反対できないような、でっかい声だった。

「谷川くんがいいですか」

C 関口くんはちよつと③コマったようすで、みんなにきいた。

「いいです」

堂本くんは大きな拍手はくしゅをした。クラスのあちこちで「 2 」拍手する音がした。

修はカーツと顔がほてった。

だめだ。できないっていわなきや。

必死に声を出した。

「ぼく、できません」

それしかいえなかった。なぜできないか、みんなわかっているはずだった。

「だいじょうぶだよ。リレーはいつも同じ人じゃなくて、いろんな人が走った方がいいんだ。みんなでつないでいく<sup>④</sup>キョウギなんだから」

修はみじめな気持ちで堂本くんの声を聞いた。

きつと、あのせいだ。バナナのせい。それからイカのせい。堂本くんはしかえしをしてるんだ。そう思った。

「じゃあ、谷川くんよろしく」

関口くんが席にもどろうとしている。

修は **D** しぼりだすようにいった。

「ぼく、できないから」

声にならない。だれにも聞こえなかったみたいだ。

横にすわっている小野くんが、しきりにこつちを見るのがわかった。

「あの……」

とつぜん小野くんが手を上げた。

「ぼくが走ります」

クラスじゅうが **1 3 1** した。

小野くんの足が早いと思っっている者はいない。修よりおそいくらいだ。

「ぼく、希望します」

小野くんは堂本くんの方へむきなおった。

「おそくてもいいんだよね」

**E** 堂本くんは何かいおうとして息を吸ったが、鼻の穴を大きくしたただけだった。

問一 ①ホウカゴ ②タンニン ③コマった ④キョウギ のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 本文中の【1】～【3】にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものを、次のそれぞれのア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- |     |       |        |        |        |         |
|-----|-------|--------|--------|--------|---------|
| 【1】 | ア さつと | イ ふらつと | ウ おずおず | エ ぐいぐい | オ ヘラヘラと |
| 【2】 | ア どつと | イ さらつと | ウ いやいや | エ バチバチ | オ パラパラと |
| 【3】 | ア ほつと | イ すかつと | ウ いらいら | エ ざわざわ | オ わくわく  |

問三 A 追いつくなり の意味としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 追いつく前から      イ 追いついたので      ウ 追いつくと同時に      エ 追いつけないのに      オ 追いつかせてから

問四 B よれつとのびたTシャツのえりをひっぱった。糸が一本ほつれてとびでていた。とありますが、この部分は「小野くん」のTシャツがどのような状態であることを表していますか。説明しなさい。

問五 C 関口くんはちよつとコマったようすで、とありますが、どういうことに「コマった」のでしょうか。「関口くん」の心中を考えて、五十～六十字で説明しなさい。

問六 D しぼりだすように とありますが、これは「修」のどのような様子を表していますか。説明しなさい。

## 問七

E 堂本くんは何かいおうとして息を吸ったが、鼻の穴を大きくしたただけだった。とありますが、このとき「堂本くん」はどのような気持ちだったでしょうか。説明としてふさわしくないものを、次のア～カの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分に従わない「修」が、にくらしくてたまらない。

イ 自分のたくらみをじゃまされて、腹立たしく思っている。

ウ 予想もしないなりゆきに、おどろきとまどっている。

エ みんなのためを思っているのに、理解されなくてつらい。

オ とつさに「小野くん」に言い返せなくて、くやしい。

カ 本心を言ってしまうたいのを、なんとかがまんしている。

## 問八

「水曜日の給食の時間」のできごとや「午後の体育の時間」のできごとから、「修」は「小野くん」のことをどう思ったと考えられぬか。答えとしてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「堂本くん」の思いちがいを正しただけでなく、苦手なことを引き受けてまで筋を通そうとする様子を見て、「小野くん」の正義感の強さに敬意を感じた。

イ 「堂本くん」のいやがらせを手伝うようなことをするのに、みんなの前でかばってくれたりもするので、「小野くん」がどういふつもりなのかわからなくなった。

ウ いつもは「堂本くん」の言いなりなのに、急に「堂本くん」に反対する態度をとった「小野くん」を見て、自分も勇気を出して強くなろうと決心した。

エ 自分と同じで内気だと思っていた「小野くん」が、「堂本くん」よりも目立つことをしようとしているので、うらぎられたような気持ちになった。

オ 「堂本くん」と「修」の仲を取り持とうとしたり、「修」の代わりに選手になったりと、いつも優しくしてくれる「小野くん」に心から感謝した。